

主イエスの権威

サムエル記上 18:10,11

マルコ 1:21~28

ガリラヤ湖北西の湖畔の町カファルナウム。今日は安息日です。イエス様は安息日にはよく会堂で教えられていたようです。勿論律法学者たちも語っていたことでしょう。ただ律法学者とイエス様とは違いがありました。それはイエス様には権威があったということです。権威といいますと、権威主義とか、あの人は権威的だとかあまりいい意味で用いられないことがしばしばあります。しかし本来は権力であったり支配する力のような意味で、悪い意味ではないのです。この世的な目線で見れば、権威はイエス様より律法学者の方があったのではないのでしょうか。ただ律法学者といっても、祭司の身分ではない平民ですから、祭儀などに関わることができないというコンプレックスもあったことでしょう。ただ律法の解釈や適用については学者でしたので周囲からは一目置かれていたことでしょう。少なくとも大工の息子であったイエス様よりは。しかし律法学者のようではなく権威ある者としてイエス様は教えられていたということです。きっと律法学者はあれこれ言うけど、実際には力が感じられない、示されなかったということではないのでしょうか。

この日、奇しくも安息日にイエス様は御自分の権威を示すことをされたのです。イエス様が会堂で教えられていると、そこに汚れた霊に取りつかれた男がいたのです。汚れた霊は自分のことを我々と言っているので、複数だったのでしょうか。一人の中に汚れた霊がたくさんいるという大変苦しい精神状態であったのでしょうか。精神的な病におかされていたのかもしれませんが。もしかすると救いや癒しを求めてそこに来ているのかもしれませんが。病というものは本人でしかわからない苦しみがあります。それでも病は恵みであるというとらえ方も一方であります。それは病に罹った人だけにしか分からないことがあるということです。その病に罹ってみて見える境地というのがあるのです。健全な人には見えないし分からない世界が開けてくるという恵みです。この意味では病に罹っても希望がそこに見えてくることがあるでしょう。しかし本来病は災いです。なければならぬにこしたことはないでしょう。病や障害が悪の力やその人の罪を通して現れると信じられていた時代であった人たちにとって、それらを患っているというのは世間的にも辛かったことでしょう。

イエス様に会うと汚れた霊は、自分には構わないでくれと言って叫びます。自分に関係しないでほしいということです。その霊にイエス様はその人から出て行けとお命じになりますと汚れた霊はけいれんという目に見える形で、そして大声を上げるという聞こえる形で出て行きます。癒されたことが、それを見聞きしていた人々にははっきりとわかったのです。人々は皆驚きました。信仰には驚きが必要です。アメージンググレースです。何御驚きも、疑問も持たずに過ごしているところには恵みもないのです。驚きにより疑問、思考が生じ信仰が覚醒され、新たにされるのです。ここで癒されるのを見ていた人たちは、このイエスと言う男は誰だろうと考えたことでしょう。権威ある新しい教え、力ある新しい教えを語るこの人は誰であるのか。ここで言う「新しい」とは質的に新しいということです。例えば私は海老名に来て新たな車を買いましたが、この車は新しいものではないというようなものです。この福音書では最初の活動として出てくるのがみ言葉に伴う癒しであります。言葉だけでなく、癒しによって実証された、力が示されたのです。それがイエスとは誰か、すなわち冒頭の神の子であるということです。イエス様こそ神の子として全知全能の父なる神の権威を授かっているとういことの証しです。

悪霊によってさいなまれるのが癒されるのは、旧約でサウル王に見ることができます。サウル王は神から来る悪霊によってその心がさいなまれます。ここで気になるのが悪霊が神から来るということ。サタンというのは旧約にわずかに出て来ますが、それは善なる神と対等な悪なる敵ではないのです。サタンはヨブ記にも見られますように神の使いでした。私どもは祈禱会で創世記を読んでいます、丁度先週は蛇の誘惑でした。蛇も神様に作られた生き物です。悪はどこから来たのか、というのはとても難しい問題ですが、やはりその原因は一つで主なる神のもとからでしょう。その悪霊によって精神的に弱っているサウルのところへ堅琴の名手であるダビデが起用されるわけです。サウル王のもとに来てダビデが堅琴を奏でると悪霊は離れていくのでした。この堅琴

がどのような物であったかは、はっきりと確定できません。お手元の讚美歌 21 の表紙にあるような弦が 6 本のものであったのか、10 本くらいあったのか、あるいは 3 本くらいのリュートのようなものであったのかいろいろの説があります。何よりも現存する楽器がないので何ともなりません。先ほど読んだところでもダビデが豎琴を奏でるとありますが、その原文には豎琴という言葉はなくただ手で奏でるとしか記されていません。余談になりましたがダビデの弾く豎琴には癒す力があるのです。因みにギリシャ神話に出てくるオルフェウスも豎琴の名手でそれを聞く生き物の心を動かし黄泉にまで行くことができましたし、その父親であるアポロンも豎琴がシンボルでした。豎琴はそのように王や神が使う由緒ある、また力がある楽器としてみられていたのでしょうか。確かにダビデが豎琴を奏でると悪霊が離れることができました。しかし今日読んだところでは、サウル王は癒されずに豎琴を弾くダビデを襲うのです。つまり豎琴では一時的ではあっても必ず癒されるということはないのです。ある意味ここに音楽療法の限界というのを見ることもできるのではないのでしょうか。それに対してイエス・キリストの癒しは確かであります。なぜなら全能の父なる神の権威、力が委ねられているからです。正常な信仰者は奇跡による癒しを切望したりしないでしょうが、それでも奇跡が起こることやその癒しがあることを否定はしないでしょう。なぜなら全能の神さまの力を信じているものですし、また神様を試みるようなことはしないはずですから、その可能性は受け入れるはずです。私どもの理性では考えられないようなことが起こる、そのような出来事に出会うと驚きます。そのような時に、驚きの業を行った人や物を崇めるのではなく、その背後で働く神様の計り知れない力を畏れるのです。それが神様への讚美となります。

病や障害が悪の力として、人間の罪を通して現れるものなら、それを退散させ、癒すイエス・キリストは悪の力に勝利しているのです。悪霊が跋扈するこの世の中にイエス・キリストが来られたというのは、悪に打ち勝ちそれを滅ぼす神の国が到来したということです。私どもが生きている今は、キリストによって神の国がすでに到来して、将来その支配が完成するまでの中間時にあります。この中間時にある私どもがすべきことは、御国の完成のために祈ることと働くことです。伝道の業にいそしむことです。神様の御国の完成の御業ためにその道具として使っていただけるようお願いしつつ歩みましょう。